

I ゲドを語る

佐藤勝彦・金沢英之・本田優子

スケジュール変更のお詫び

本田

本日はこのような悪天候の中、清水真砂子先生の記念講演会「ゲドを聴く」にお越しいただき、心よりお礼申し上げます。

まず最初に、お詫びとご説明をしなければなりません。この講演会は当初、二月二日に行う予定でした。けれども、すでにご承知かと思いますが、我が校で麻疹が発生しましたので急遽、清水先生とご相談の上、本日に延期させていただきました。そのため、二日の段階では比較的余裕を持ったスケジュールで動いてくださることになっていたのですが、今回は今日おいでいただいて、今夜すぐにまたトンボ帰りという、たいへん厳しいスケジュールになってしまいました。ところが今日のこの大荒れの天候です。羽田出発が一時間遅れ、千歳に着陸してからも、飛行機の中で一時間以上缶詰になってらっしゃいました。そして先ほどようやく、今から電車に乗るとのご連絡をいただきました。

それで、今こっちに向かっていらっしゃいますので、到着さ

れるまで何とか札幌大学の教員で前座を務めさせていただくことになりました。申し訳ございません。そのことについて、学会長であり文化学部長でもある佐藤勝彦の方から一言、ご挨拶申し上げます。

佐藤

ただ今、本田先生から講演者の清水先生が悪天候のため到着が遅れていることがアナウンスされました。この自然界の中では私たち人間は本当に無力です。私は情報科学を勉強していますが、世の中どんなに技術が進んでも、この吹雪によって飛行機の到着が遅れてしまうんですね。我々人類が自然界をコントロールしているように思っても、清水先生を時間通りここにお連れすることはできません。

講演会にお越しくださいました皆様にお詫びを申し上げますとともに、清水先生が到着されるまで、私たちが何とか前座を務めさせていただきますと思っています。

清水先生は児童文学者であると同時に翻訳者でもいらっしゃいます。ルグウィンというアメリカの女性作家が書いた『ゲ

ド戦記』を日本語に翻訳された先生です。

ここに私たち三人がなぜいるのかというと、私たちは『ゲド戦記』のファンであると同時に、清水真砂子先生のファンでもあります。

文化学部では毎年11月の第1週にスペシャルウィークという、普通の講義とは違うスペシャルな一週間を設けていて、学生と教員が面白い企画をします。今年度は、その中で『ゲドを語る』という企画を行いました。私たち三人と、今ここにいらっしゃるんですが文化人類学を研究されている川村先生の四人で、『ゲド戦記』についてシンポジウムを行いました。その時を思い出しながら前座を務めさせていただきます。

『ゲド戦記』については、すでにお読みになった方もいらっしゃると思いますが、まず物語の粗筋を金沢先生に解説していただきます。

それでは金沢先生、よろしくお願いします。

金沢

はじめまして。金沢と申します。粗筋を説明しなさいということなので話させていただきます。では僕が前半を説明して、後半は本田先生、いかがでしょうか。

今日いらっしゃってる皆さんは『ゲド戦記』はお読みになっているかと思うんですけど、あるいは、映画で見たっていう方もおられるかもしれません。一昨年でしたか、スタジオジブリが映画化しましたのでそちらでご覧になった方もいらっしゃる

かと思います。いかがですか、皆さん。粗筋説明したほうがいいでしょうか。……頷いている方もいらっしゃるので、では簡単にお話させていただきたいと思います。

その前にちよつと自己紹介しておきますと、僕はこの文化学部で古典文学を教えています。日本の古典文学なんですが、特に古い方で『古事記』なんかを中心に研究している者です。ですから、まあ神話なんかをよく読んでいるわけなんですけれども、そういう視点から見ても、このルゥグウインの『ゲド戦記』って非常に面白い作品なんです。個人的に大好きな作品でして、ここにおいてある本も私物なんです。自分のゼミの学生たちと『ゲド戦記』を読んだりしております。なかなか六冊全部というのは大変なので、ゼミで読むのは最初の三冊です。ですから、そこまでちよつと話をさせていただきたいと思

第一巻——「自分」と「自己の影」の統合

僕が最初に『ゲド戦記』を読んだのは、大学生の時だったんです。その頃、『ゲド戦記』はまだ三冊しか出ていませんでした。最初の三冊が六十年代の終わりから七十年代にかけて書かれていまして、長らくその三部作で完結していたものです。それが九十年代になってから残りの三冊が間を置いて刊行されたという経緯があります。ですから、最初の三冊がある程度のまとまりを成していて、一冊目は、『影との戦い』というタイトルです。原題はちよつと違うんですが、このタイトルは清水

さんがおつけになったのか、それとも編集部のアイデアもあったかもしれませんが、中身を非常にうまく表しているタイトルでして、これはゲドがまだ少年の時代の話です。ジブリの映画の中ではゲドはかなり年齢がいった男になっていましたけれど、あの映画で、ゲドの弟子に当たるような役をしていたアレんという少年が出てきますね。ちょうど、あのアレんに当たるくらいの年齢の頃のゲドを描いた作品です。ゲドは非常に力のある魔法使いに後々なっていくわけですが、若い頃、その自分の才能というものをもちろん自覚しているけれども、まだ精神的に未熟で、自分が持っている才能に見合うだけの精神的な成長を遂げていない、という段階の話です。

それである事件がきっかけで、自分の虚栄心から「影」というものを呼び出してしまうんですね。この「影」というのは何だかわからない、正体不明の恐ろしいものなんですけど、これを太古の世界なのか死の世界なのか、そういうた所からある魔法によって呼び出してしまおう。それ以来、ゲドはその影にずっとつけ狙われるようになっていくんですね。この影というのは、佐藤先生が触れられると思いますが、ユングの深層心理学なんかを連想させるもので、そうした面から見ていくのも面白いんですが、物語としては、ゲドが、最初は恐れていた影とやがて立ち向かう決意をする。そしてその「影」、それは言ってみればゲド自身の暗い部分なわけですけど、これを克服し、自分の中のそうした部分を認めていくということで成長を遂げていく。こんな話になっています。

第二巻——「男性」と「女性」の統合

それが大魔法使いへと成長していく第一歩であつたわけですが、第二巻は『こわれた腕輪』。これも日本語の本のタイトルが原題とだいぶ違っているものなんですけれども、やはり非常に象徴的なタイトルだと思います。この第二巻では、ゲドは出てはきますが、前半には出てこないですね。後半登場するんですが、主役はほとんど別の人物に譲っているような形です。第二巻の主役は少女です。後々、ゲドのパートナーとなっていく女性。テナーという、映画の中ではだいぶ年齢がいった女性として描かれていましたけれども、まだ子供の少女だった頃の話、これがメインのストーリーになっています。

このテナーという女性はこちらと特殊な身分です。ある島の中に「アチュアン」の墓所」という地下迷宮があつて、これは古い闇の神を祀る神聖な場所なんですけれども、そこで神に仕える巫女として育てられた少女なんです。このテナーは巫女となるために幼い頃に名前を奪われるんです。

『ゲド戦記』の中では、ご存知の方も多いと思いますが、名前前というものが非常に重要な役割を果たしています。物事には必ず真の名前というものがある、というのが、ルゥグウィンがこの『ゲド戦記』の世界で設定した重要な概念なんですけれども、その名前前というのは単なる「記号」ではなくって、その名前が付けられているものの自身の本質的な部分を表しているものだ、という考え方がそこにあるんですね。ですから相手の名



前、本当の名前を知るといふことは、ある意味、その相手を支配する力になるし、あるいは相手を完全に理解するということにもなる。

それで、これはその名前を奪われてしまった少女の話なんですね。ある意味、自分自身というものがいない少女が描かれているわけですが、それが巫女として神様に仕えている。その迷宮には腕輪が納められているんですが、その腕輪は壊れているんですね、タイトルどおり。半分だけそこに残されていて非常に由緒のある腕輪で、これが完全なものとなった時に、世界を統治する大きな力を発揮するということです。ゲドが、実はこの前の話、『影との戦い』の中でその欠片の残り半分を手に入れています、もう片方を求めてそこにやってくるんですね。ところが、地下迷宮に囚われてしまい、そこから出られなくなってしまう。真っ暗な、非常に大きな洞窟のような迷宮で、そこに閉じ込められて後は飢え死にするのを待つばかり、という状態になるんですが、この少女のテナーは、どうしても彼が気になってしまう。で、ゲドのところに行くんですね。最初は、特にテナーの方がゲドを受け入れることができないのですが、やがてその暗闇の中で、ゲドという男性とこの少女が心を通わせるようになって、そして最後はテナーがゲドを助けるということになるんですね。

第一巻では「影」と「自分」という二つが統合される話だったわけですが、第二巻では、今度は「男性」と「女性」という二つの原理がやはり一つになる。そうして、お互いにさらに新しい成長を遂げていくというのが語られています。特にこの二つの相反するものと、その統一というのは、ル・グウィンが『ゲド戦記』だけではなくて、ほとんど全ての作品の中で非常にこだわっているテーマでして、ちょうど、中国の陰陽論というのがありますけれども、陰と陽の二つ……正反対のものが一つになることで初めて完全な状態になる、という考え方。これに非常に取り憑かれた作家でもあるわけなんです。この『ゲド戦記』の中でも一巻、二巻と、特にそうした要素が強く読み取れるものになっています。これは、おそらくユングの心理学なんかに非常にこだわっている部分だと思います。

第三巻——「生」と「死」の統合

そうして第三巻ですが、第三巻は『さいはての島へ』というタイトルが日本語訳ではついています。第一巻が「自分と自己の影」、第二巻が「男と女」という、二つの対立するものの統合だったとすると、おそらく第三巻のテーマというのは、「生と死」。この、やはり相反する二つのものというのがテーマになっていると思います。この第三巻はスタジオジブリの『ゲド戦記』の、多分、一番元になっている巻だと思っていますので、ご存知の方も多いかと思います。あの映画は、だいたい第一巻から第四巻くらいまでを一つにまとめた作りになって

いて、だいたい原作とは離れているんです。あの中にクモという人が出てきて、その人が生と死の堺を隔てる扉を開けてしまった、となってますが、あれはこの第三巻の話なんですネ。

もうこの時期には、ゲドはだいたい中年になっていまして、もういいおじさんになっているわけです。しばらく平和な時期が続いたんですが、何か世の中に異変が起こっていきまして、特に魔法というものが世の中で使えなくなってきたらしい。それも辺境のほうからそういう状況が広がってきている。それで、その原因は何なのか、ということを探るべく、それを探索しに行くという話なんですネ。そのときに、例のアレンという少年、これは将来王になるべき存在なんですけれど、彼と一緒に連れて行く。まあ弟子みたいな形で連れて行くんですネ。

映画の中のアレンは、なんだか一番最初のシーンからよく理由もわからずにお父さんを殺してしまったりして、ちょっと行動原理がわからない少年に描かれています。原作の中ではアレンというのはそうではなく、少年時代のゲドを思わせるような真つ当な少年として描かれています。ただ、彼は魔法使いじゃなくて王子なんです。ですから将来、王になるべき存在なんです。ただそのための成長を遂げていない。それが、今度はだんだんと老年にさしかかっていく時期のゲドと一緒に行動すること、ゲドがかつて通過したような人生の道のりついでを学んでいく。そういう話になっているんですネ。ですから、ここには「世代から世代への伝達」ということが一つ、大きなテーマにもなっているんだと思います。

そしてその異変の原因を探しに最果ての島、この世の一番果てにある島へ渡っていく。その過程でいろいろな困難、試練が待っているわけです。何も無い、死の海を渡っていかなくちゃいけない。その途中でなぜか無気力になってしまつて、生きていく意思というのが奪われていくような、非常に危険な状態を通過して、この最果ての島へやつて来るんですネ。そして、この「生」と「死」の世界のバランスを失わせている男を発見して、それと戦うという話になっていきます。

そしてこの最後に、「生」と「死」という非常に大きな二つのものが、今度は統合される。というよりも……、このクモという男は死にたくない男なんですネ。ですから「死」を否定しようとするわけですが、そのことによって逆に「生」を否定してしまうということになる。そうではなくって、「生」と「死」を両方受け入れることが、本当に生きるために必要なんだ、ということこそ第三巻は語っています。そういう意味では一巻が自分と、そして影の両方を受け入れる、ということをつたえたのとまた同じこと、それがさらに、世界全体に拡大されたこと、というふうにも言えるかと思います。

このように一巻から三巻までは、最初は非常に個人的な「自分自身の問題」から始まつて、二巻では男女という「人と人との関係性」の話、そして最後に「生と死」という、もっと大きなところへ、同じ構造を持った話がだんだんとスケールを大きくしながら繰り返されていく。その中でこのル・グウィン自身の主張が、非常に分かりやすい形で行われていく。だいたいこ

の三部作というのはそういう構造になっているかと思えます。

ここから先がまたちよつと雰囲気が変わっていくのですが、この年から十数年、三巻から四巻までの間というのは十数年書かれていませんので、おそらくその間に、作家のル・グウィン自身の成熟があり、後半の三部作というのはまた違った観点から面白いことが出てくるんですね。そこはおそらく本田先生の方からうまく語ってくれると思いますので、ここでバトンタッチをしたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

批判の声のあがった第四巻——新しいフェミニズム

本田

ごめんなさい。こういう展開になると思っていなかったの
で、私、ほとんどちゃんと本のおさらいをしていないので非常に不安なんですけれども……。

まず四巻では、非常に大きくゲドの様子が変わります。それ
までは、本当にかっこいいヒーローだったんですけれども、四
巻になると、もうヘロヘロのオジサンになって登場します。魔
法も使えなくなっているんですね。そういう男性が、元もと大
巫女であったテナーと再び出逢い、さらにテナーが養女にした
女の子も加わり、その三人の物語になっていきます。そのテ
ルーという女の子が、映画に出ていた火傷を負った少女です。
もう皆さんご存知かと思いますが、そういう血のつなが
っていない女の子と、それと最初は夫婦でもないゲドとテナー
という、そういう男女の関係というのがとっても面白いと、私

は思っています。清水先生もご本の中で「ル・グウィンがよく
考えている」とおっしゃっていますが、そのような三人がどの
ように家族というものを形成していくのが、大きなテーマで
す。

つまり、第四巻はテナーという女性を軸にした物語です。あ
る意味、ヘロヘロになったオヤジを女性はどういうふうを迎え
入れることができるのか（笑）。いろいろ考えさせられ、私に
はとっても興味深かったですね。清水先生も多分講演でおし
やるのではないかと思います。四巻が出た時には、それまで
の『ゲド戦記』ファンから強いブーイングがあったようです。
「どうしてゲドをああいふうに描いたんだ」という批判の声
があがったらしいんですが、清水先生は「大変しつくりきた」
とおっしゃっていて、私も実はしつくりきました。

やっぱりカッコイイ英雄だけをずっと描くと、「死」の問題
というのは描けないんじゃないかと思って……。人間は、カッ
コイ、エネルギー満ち溢れた状態のまま「老い」を迎える
ことはできないのであって、その段階を飛び越えて「生」と
「死」を語るということは無理だろうと、私は思うんですね。
だとすればやっぱり、そういう状態をしつかり見つめ、受けと
め、「家族」とか「男女」とかを捉え直さないといけないと思
っています。そういう意味で四巻は、ある意味、新しい形のフ
ェミニズムというか、そういうものをル・グウィンが非常に意
欲的に描いた作品だと、私も思っています。

第五卷——「世界の成り立ち」と竜の存在

語りたいことがたくさんあるので、粗筋を少し端折らせていただきますけれども、五巻では大きなテーマとして、世界の崩壊と人間世界における死の問題、つまり「あの世の問題」というのが描かれています。この物語の舞台は「アースシー」という世界なんです、その人間世界の元もとの成り立ちというのが、竜の存在と深く関わっています。「ゲド戦記」というのは全巻そうですね、竜というものがものすごく大きな存在として登場します。

私は昔から、どうしてかわからないんですけど、竜がとても好きなんです。まだ自己紹介をしていませんでしたが、私はアイヌ文化、アイヌ語を専門にしています。「ゲド戦記」には、先住民族の世界観というのが深く反映されていると言われ、そういう問題意識からもこの物語がたいへん好きなんです。

それで、仕事柄よく白老のアイヌ民族博物館に行くんですが、帰り道、高速道路を運転していると、苫小牧西インターと東インターの間に、一気にバーツと視界が広がるポイントがあるんですよ。そこを通る度に必ず、「竜、飛んでるような気がする」って思うんですよ。「飛行機が飛んでるんなら、ここに竜が飛んでもおかしくないのに、どうしてないんだろう」っていつも必ず思うくらい、「大空に竜が飛ぶ」というのは、私の中では「あってもおかしくない」もののなのです。その竜と

というのが人間世界と深い関わりを持つところ、まず大好きですね。

ここで、ではどのような関わりかというネタばらしをすると面白くないので、ぜひ読んでいただきたいんですが、ちょっとだけお話するならば、太古、竜と人間は同じ種類の人間であった。ところがそれぞれ違うものを求め始めたので、別々の道を歩むことにした。そのとき、人間はあるものを手放しあるものを獲得した。竜もまた、あるものを手放しあるものを選んだのだそうです。そういうふうに世界の構造と竜の関わりというのがまず大きなポイント。

「あの世」の捉え方の変化

もう一つは、「生」と「死」の問題ですね。もちろん先ほど金沢先生もおっしゃいましたけれども、それはずっと全巻に流れているテーマです。あの世との境目に「石垣」というのがあるんですよ。それがどんどんおかしくなっている。

私は、アイヌの世界観というものの、ある程度自分の専門の分野として関わってきたからか、特に三巻とかに描かれる死者の国の姿に違和感を感じていたんですよ。もちろん、ルーゲウインの書いている世界観にすごく共感する部分もありましたが、でも、どうしても「あの世」の描き方には納得できないものを感じていました。そこは、草も生えず風も吹かない闇の中を、死者たちが無言で徘徊している世界なのです。

たとえば、ちょっと余談になりますが、アイヌの世界



観ではどういふうに「死」というものを考えているか。もちろん、現代のアイヌの方が全員そういうふうに考えていらつしやるとは思えないんですが、伝統的な世界観として言われているのは、基本的に「この世」と「あの世」というのはそんなに変わらないものであるということ。たとえば、洞穴の中をくぐっていくと、最初ちょっと広いけれどもだんだん狭くなつていって、またそこを通り抜けるとパースと明るくなつて、そこにコタンがあるつていふんですよね。コタンというのはアイヌ語で「村」のことですが、この世と同じように茅葺の家があつて、そこにもう亡くなつてしまった人たちが暮らしている。みんな本当に和やかで幸せで、悩みもないんです。ですから、一瞬、死ぬ時の苦しみがあつたにせよ、「あの世」というのは決して怖くないというふうを考えられていたみたいです。

私のアイヌ語とアイヌ文化の先生は、先年お亡くなりになつた萱野茂さんですが、私は最初の一年は萱野さんの家に居候し、それ以来十一年間、その二風谷という村に住んでいました。そこでもやつぱりよく言われたのは、人間にとって一番幸せな死に方つていふのは、枯れ木が音もなくフワッと倒れていく、そういう死に方なんだつてこと。死んだ後は、先祖が待っている幸福な国へ行けると言われているので、まあ、地下の

世界とも言われるんですけども、基本的には地続き感がありますよね。

にも関わらず、『ゲド戦記』で描かれている「あの世」というのは、どうもそうじゃない。そこに大きな違和感がありました。けれども、五巻の一番最後に、そこまで築かれていたような死後の世界というのが、一気に崩壊するんですね。それが私にはものすごく心地よいというか、「やつぱりね！」つていうような気持ちになりました。こうじゃないと、人間が生きていくということがとても辛くなるんじゃないかつていふ気がして……。やつぱり「死」があるからこそ、死後の世界というのが豊かだと考えられるのであつて、「死」というものを拒否することによる中途半端な死後の世界というのは、闇に閉ざされた暗いものになるといふことが、とってもわかる気がしました。

もちろん、アイヌの世界観の中でもそういう幸せな死後の世界ばかりじゃなく、「テイネ ポクナモシリ」と、アイヌ語で言われる世界があります。「テイネ」というのは「湿つた」とか「濡れた」という意味で、ここに手稲区の方がいらつしやつたら申し訳ないんですが、語源は同じ「濡れた」という意味で、湿地とかに付けられている言葉です。この「濡れた世界」というのは、暗黒で、花も咲かない、鳥もない。そういう世界つていふのは、要するに、この世で非常に良くないことをした人間が追い落とされていくような世界なのです。面白いのは神様もそこに追い落とされるんですね。神というのは、アイヌ社会においてけつこう人間と対等な関係で、絶対的な存在で

はないので、悪いことをすれば神に対しても「ティネ ポクナ モシリに落とすぞ」っていうふうに文句をつけるんです。だからアイヌの世界観にも、決して闇の世界がないわけではないんですが、少なくとも真つ当な人間の行く死後の世界というのは、光に満ちた世界である。それが私の中では、なんとなく先住民族の世界観として——そんなに勉強してないのでわからないんですが——、少なくともアイヌ文化を学んだ人間にとつての死後の世界でした。ですから、最初のほうで描かれていた闇の世界が、最後のほうで崩壊していく姿が、ある意味、とても嬉しく、モヤモヤ感が消えたところでもありました。ぜひ、読んでいただきたいと思います。

先住民族の位置づけ

また、最後に明らかにされた「世界の成り立ち」の中で、私がとても感動したのは、先住民族の位置づけに関わる点です。アメリカの方で、一度映画が作られた時に、色の白い人が主人公になっていたらしいんですね。ところが読んでいただければわかるんですけども、アースシーは基本的に肌の色が黒い人たちの世界です。大巫女をやっていたカルガド人のテナーは白い肌をしていた女性ですが、ゲドももちろん黒い肌です。でも、今回のジブリのDVDもあまりそういうふうには見えないので、その点についても原作者のル・グウィンには、ちょっと問題意識を漏らしていらっしゃるようですね。

そういうことで、基本的には肌の色が黒い人たちの世界とい

うのが展開されるんですが、となると、どうしても先住民族とオーバーラップするようなイメージが私の中にはあります。ところが、最後を読んでいただければわかるんですけども、その黒い肌の人たちというのは、実は、かつて誓いを破った人たちのだと語られるのです。今、いわゆる先住民族の世界観や社会というのは、地球に優しい、環境に優しい「圧倒的な善」として受け入れられているような気がします。私はアイヌ文化を勉強している人間なんですが、まず太前提としてそれがあつたら「嘘だろう」って思うんですね。「本当にそうなの？」から始まって、ちゃんと検証して、その上で「たしかにこの点はスゴイね！」って納得すべきだと思うのです。そういう意味で、最後に明らかにされる世界の構造という成り立ちの歴史における、肌の色の黒い人たちの描き方にも学ぶ点が多かったですね。価値観が転換します。「ル・グウィンという方は本当によく考えているな」ということを、改めて感じました。

本当に力を持った「第三の言葉」

最後に一つだけ。これも今日、話されるかもしれませんが、「第三の言葉」ということを清水先生は語っていらっしゃいます。何かというと、テナーの言葉を「第三の言葉」というふうに表示されているのです。これは、清水先生が『ゲド戦記』について語られているブックレットですけども、ここには「テナーという人は最初のうちは論理の世界で生きてきた」と書かれています。カルガドの社会というのは、まあ白人の世界なん

ですけれども、「知の世界」というか「論理」、ある意味「男性の論理が貫徹している社会である」と。テナーは一旦はそこで育ったわけですが、その後、普通に結婚して子供を生むんです。娘と息子がいて、息子の方はとんでもない穀潰しで、テナーは苦労してるわけですね、……同じ母親としてとつてもよくわかりますけど。そういう普通の女性が辿るような生活をした後で、もう一度「世界を取り戻す」戦いにテナーは乗り込んでいくわけですよ。本当に主人公みたいな役割を果たすわけですが、その過程を清水先生は「言葉の問題」として捉えられている。

テナーは最初は男性の言語である「第一の言葉」を語っていた。その後、普通に旦那さんと生活し子供を育て、親としての悩みを抱え、「生活者」として生きてきた。そこで語られる言葉を「第二の言葉」とおっしゃっています。「第二の言葉」というのは非常に力強いんですけども、ある意味生活べつたりで、説得力を持たない。それを象徴するものとして、コケババというまじない師のおばあさんの言葉があるのだと。コケババの言葉というのはよくわからない。「生活者」というのは力を持っているけれども、その言葉というのは普遍的な力を有することができないというんですね。そこから「第三の言葉」が生まれるわけです。テナーは「両方の世界を潜り抜けた後で、本当に力を持った「第三の言葉」を語り始める」と、おっしゃっています。

私はここに、ものすごく感銘を受けました。私自身が辿って

きた道と少し重なるように感じたのです。私はかつて大学という世界で、ある程度、ほんのちよつとですけれども勉強をしました。そこはやっぱり男性の世界であり、私はそこで「知の世界」を少しはかじったと思います。そのあと、二風谷という村に行つて、アイヌのおじいさん、おばあさん、おじさん、おばさんの中で生活しました。本当にそこでずうっと暮らし、骨を埋める覚悟でいたのですが、そこには本当に生活者の言葉が満ち満ちていて、私はものすごいカルチャーショックを受けたのです。「今まで自分が大学で学んできたことって、いったい何だったんだろう？」って。ホントにね、最初はガツクリきましたね。同時に、その人々を尊敬しました。つまり生活者の言葉に触れ、力を実感したわけです。

でもやっぱり、それだけではなかなか、その人たちが持っているものを、十分この世の中に伝えきれないっていうところが、残念ですけれども、あるんですね。だとすれば、私はいま大学という、ある意味、また学問の体系の中にいるわけですが、その中でどういう役割を果たすことができるのかというのを、考えるわけです。二風谷を離れてからずっと、そのことを考え揺れながら生きてきたわけですけど、清水先生のご本の中で「第三の言葉」というものに出会い、自分の立ち位置を獲得したと感じています。

金沢先生などは最先端、佐藤先生もそうですけれども、まさに最先端を走っていらつしやる優れた研究者です。私はいつもその後ろをモタモタモタうってついて歩くだけですけど、でも

そういう先生方の語ろうとすること、その言語の意味やその凄さというのは、ある程度わかる。同時に、私の友人というかオバチャン仲間、つまり生活者の言葉が持つっている力も確信しています。だとすれば、そのような「第一の言葉」の語り手と、「第二の言葉」の語り手との間に立ち、「第三の言葉」を語ることによって、ちょっとは両者を繋ぐことができるのではないか。清水先生のご本を読みながらそんなことを考え、フーッと気持ちが高揚した感じがしました。自分の立ち位置とか軸足を「第三の言葉」に置くことが、私の役割なのではないかというふうに思ったのです。

そういうことまでも、この『ゲド戦記』、そして清水先生のご本から学ぶことができたように思っています。すみません、長くなりました。

互いに「真の名前」で呼び合うこと

佐藤

お二人の先生に本の紹介をしていただきました。本の紹介と同時に、この本に書かれている内容の深さの一端にも触れていただきました。

本の魅力は、読んだ人の感性で異なりますが、老若男女、いつ読んでも、何度読んでも「気づき」があります。この物語では「真の名前」を大切にしています。「真実」ということです。自分の本当の名前を告げることは、自分自身の真実を見せることとなります。互いに「真の名前」で呼び合うことは、「真実」

に向かつての互いの理解を深めるということです。私は、この物語から「真の名前」には共通する意味（物語）が存在することを学びました。学びとは、「言葉の意味」を共有することです。たとえば、若い二人が「好きだよ」「愛してるよ」という言葉を簡単に使います。しかし、その言葉の意味をお互いが共有するためには、長い時間をかけた努力が必要になるのです。青年期から老年期までの長い人生の旅路を辿る『ゲド戦記』（全6巻）のように！

この本との出会いは、ある女子生徒の紹介でした。第一巻が出版された直ぐの頃だと思いますが、壮大なファンタジー作品の少なかった時代、生徒たちが回し読みしていた記憶があります。若い頃、ファンタジックに楽しんで読んだ作品も、年を重ね経験を積んでから読むと、作品の深さが一段と輝きます。

作品の縦糸は、不安定な世界を象徴するアースシーという多島海世界を舞台に男性ゲドと女性テナーの一生を紡ぎだし、横糸には、人生に付きまとう「生と死」、「男と女」、「幸と不幸」、「知恵の力（魔術）」と世俗の力、「人種問題」、「フェミニズム問題」、科学万能への問題など、今を生きる私たちの大いなる指針になります。

このような素晴らしい、壮大な作品を書いたルゥグウィンですが、その背景には——全く個人的な見解なんです——、家庭の文化性（家庭環境）があつたのではないかと思います。彼女の父上は文化人類学者で、先住民族（ネイティブアメリカ



ン)をライフワークにしていた方ですし、母上は作家です。彼女は小さい頃から、先住民族のこと、世界の物語や神話などの中で育まれたのですね。家庭における文化性の素晴らしさが作品の中からも伝わってきます。

ユングの深層心理学との関わり

第一巻の「影との戦い」では、少年ゲドはローク学院で魔術を学び、**知恵の力**を身に付ける。ところが、青年期特有の高慢さゆえに、修業中あやまって死の影を呼びだしてしまう。彼は、その**死の影**に怯えながら、きびしい試練に耐えることとなります。この**影との戦い**は、青年から大人へのイニシエーション(通過儀礼)と見ることもできます。私たちは、意識的に考え、行動していますが、一方で無意識の世界もあります。ドイツの心理学者ユングは、意識の発達を無意識の世界と結びつけて研究した人です。彼は、無意識は**影**のように意識につき従っているものと解釈しました。たとえば、**生と死**です。知恵の力(魔術)を修得したゲドに、今まで意識しなかった**死**(無意識)が、意識の中に立ち現れようとしていたということです。同様に、**光**闇、**明**暗、**上**下、**善**悪、**楽**苦、**幸**不幸……、の前のほうが**意識**、後のほうが**無意識**となります。

意識と無意識の対立として捉えたユングは、意識をプラスのイメージ、無意識をマイナスのイメージの組み合わせと考えました。しがたつて、青年ゲドは、厳しい修行に耐えて修得した魔術(知恵の力)をプラスイメージとして強く自己主張し、一方マイナスイメージの**死**(無意識)はことさらに否定的に捉えることになります。

このマイナスイメージのシンボルをまとめると、「死」「闇」「暗」「下」「悪」「苦」「不幸」という世界になります。これは、地下の世界、死者の世界ということになります。

第二巻の「こわれた腕輪」で、大海に浮かぶ島々のアースシー世界では、島々の間に争いが絶えません。**影**から解放されたゲドは、一段と逞しくなり、平和をもたらす不思議な腕環(神話世界でのシンボル)を求めて旅に出ます。ゲドは、カルガド帝国にあるアチュアンの墓地の巫女、テナーに出会います。アチュアンの墓地、即ち**死者の世界**です。

ユング派のエーリッヒ・ノイマンは、意識世界を神話世界と結びつけて、人類全体の意識の発達を神話の中に見出した研究者です。作家ルィグウィンさんは、物語世界にユング心理学の研究成果をふんだんに取り入れていることがわかります。

何はともあれ、この作品は、**人が生きる**ということを深く考えさせてくれると同時に、明日に向かって生きる「**真の知恵**」を与えてくれる気がします。

この作品の世界には、私たちが忘れていている世界があります。それは神話の世界です。皆さんご存知の、『ナルニア国物

『語』というファンタジー作品は、キリスト教という世界で描かれています。『ゲド戦記』の神話の世界とは、どのような世界なのか、専門の金沢先生に解説していただきます。

神話的パターンを踏まえた第一〜三巻

金沢

佐藤先生の振りの通りになるかは分かりませんが……、今、私たちが神話を信用してないという言葉がありましたけれど、それはそのとおりなんです。神話が好きだという方もこの中にたくさんいらっしゃるかと思いますが——僕も好きなんですけれども——、好きであつてもそれが本当に起こったことだとは、普通、我々は考えていないんです。それは本当の意味での神話ではありません。神話というのはどういふ話かというのと、そこに語られていることが「真実」であると本当に信じられている話、それが神話なんです。

たとえば、進化論とか宇宙論っていうものがありますよね？ 猿から人間が進化してきたということを、皆さんよくご存知かと思えます。中には信じていらっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんけれども、普通、学校教育を受けてくる中で、それを信じるようになるわけですよ。ところが、誰も猿から人間が進化してくるところを見たことがある方はいらっしゃると思います。僕もありません。また、宇宙がどうやって出来たかという説明も、たとえばビッグバンから始まったという話がありますが、誰もそれを見たわけではないんです。そう

いう意味では、やはり今の宇宙論や進化論というものも、我々はあるお話を信じているというわけです。

そういう意味で、神話というのは、かつて信じられていた話だったんですね。神話ではよく、この世界がどうやって出来たかということが大きな主題として取り上げられますけれども、そこで語られていることは、実際にかつては信じられてきたわけで、今で言えば進化論とか宇宙論の代わりをしていたものが神話だったというわけです。そうした神話的な物語っていうのがいくつもあるわけですが、世界中の神話を見ていくと、ある程度決まったパターンみたいなものがあるんですね。たとえば『ゲド戦記』のようなファンタジー小説というのは、これはかなり神話的な物語とよく似たパターンを踏まえて書かれたものであるわけです。

僕が大学生の頃は、三大ファンタジーと呼ばれていたものがあって、『ゲド戦記』と、先ほど佐藤先生のお話にありました『ナルニア国物語』、それからもう一つは有名な『指輪物語』ですね、トルキン。映画にもなりましたが、そうした種類のファンタジーというものには、非常に神話とよく似たタイプの話があります。簡単に言うと、英雄がいるわけですが、最初は力を持っていない。その英雄が何かの冒険に巻き込まれるわけなんです。たいてい、生まれた場所から別の場所へ旅立っていった、旅立った先である種の試練を受ける。これは怪物との戦いであつたり、いろいろなパターンがありますけれども、非常に困難な仕事というのをやり遂げるんですね。そのことに

よって力を、常人が手に入れることのできないある種の力を、手に入れる。そうして特別な存在となつて戻ってくる。こういうタイプの話というのは、皆さんきつと頭の中に思い浮かぶだろうと思いますけれども、先ほど粗筋を語りました第一巻から第三巻までというのは、これは基本的にこうした神話的パターンをよく踏まえた話、非常によく踏まえた話になっていると思いますね。そうしたジャンルの中でも、特別よくできた作品だと思います。

さつき言いましたとおり、初めて読んだのが大学生のときだったんですね。それをまた繰り返し読んでいるわけです。僕は今年で四十になるんですけども、今読むと、大学生で読んだときよりもっと面白いですね。多分、この『ゲド戦記』っていうのは一生読める小説だと思うんです。ただ、そのときの面白さと今読んだときの面白さというのは、やっぱり多少変わってるところがありまして……。ちょっと説教くさくて鼻につくところっていうのが、ル・グウィンの小説はどれも非常に多いんですけども、そういう昔は「嫌だなー」と思っていたところが今は凄く面白くなってきて、どうも大学で学生に教えていると説教したくなってくるようでして（笑）、そういうところが面白くなってきたというところがあります。

四巻目以降は男性には書けない最上級の小説

それからもう一つは、先ほど本田先生の話にもありましたとおり、四巻以降というのはガラッと変わるんですね。三巻目まで

というのは、今言ったように、神話的な物語として読める話で、そのおもしろさというのが非常にあります。ところが、そういう面白さが四巻以降なくなるんですね。四巻目というのは、もうほとんどファンタジーじゃないんです。もう、普通の小説になっています。ただ、普通の小説としてものがすくいい小説です。「これはファンタジーだから」と言つて読まない人もいるかもしれませんが、それはとてももったいない。これは本当に文学として最上級のものだと思います。その四巻目以降というのは、非常にル・グウィンの女性としての面、女性性から見ることが出てくる巻だと思うんですね。

先ほど言つた神話的な物語の構造というのは、基本的に男性の社会の中から出てくるものだと思います。それは元を辿っていくといろいろあるんですが、男性が社会を作っていく中で、たとえば大人になるっていうことがあります。成年式というものがありますが、子供が大人になっていって社会の一員として迎えらるるために、やっぱりある種の試練を乗り越えなければならぬというのが、かつてはあったわけですね。今の成人式というのはそういう本旨からずれたものになっていますけれども、元もとは大人になるために厳しい経験を通して、そして大人としての資格を手に入れて社会に迎え入れられる、ということがあったわけで、ごく大雑把に言ってしまうと、そういう構造というのが、神話的な物語の中に反映されているんですね。そうした社会の構造というのは、基本的に男性社会の中で形作られてきたものであって、神話というのも、突き詰めてい

くとそういうところに立脚している。

ル・グウィンには女性なんですけれども、最初の三部作というのは非常によくできた三部作である、とは思いますが、結局その男性的な物語の構造に乗った中で書かれている、というところがあるんですね。ところが、四巻以降はそれがガラッと変わる。これは三巻目まで、もしかしたら男性の作家でも、非常に優れた作家であれば書けるかもしれないと思いますが、四巻目以降は、僕は男性には書けない小説だろうなあと思います。そうした面白さって凄くあるんですね。それはもちろん書けないけれども、男性から見ても面白いものでもあり、むしろ男性だからこそ興味深いところがありますね。そうしたものになっていく。これは非常に大きな変化です。

だから先ほど、本田先生の話にも第四巻が出たときブーイングがあったという話がありました。で、それもよく分かるんです。三巻目までの『ゲド戦記』のファンだったら、四巻の変貌ぶりというのは、ものすごく戸惑われるものだと思います。実際、大学時代の僕の周りにも「四巻はダメだ」と言っている友人がいました。けれども、今読むとかえってそこが面白い。ただこれは、僕が大学生のときに読んでも分からなかっただろうと思います。今読むからこそ、少しは分かると思います。それでまだ分かってないだろうという面がだいぶあるはずなんです、おそらく、これからさらに二十年経った後に読んだら、きっと今分らない面白さというのが分かる、そういうような類の小説だろうと思っています。

そういう意味では、ル・グウィンも一生かけて書いているわけなんですけれども、読むほうも一生つきあえる小説じゃないかなと思います。もし、この作品を読んではないという方がいらつしやったら、今からでも全く遅くありませんので、ぜひ読んでみていただきたいと思います。何かそこらへん、本田先生……補足ありますでしょうか。

本の紹介

本田

はい。私、やっぱり四巻がわかるようじゃないと「女として青いよ」(笑)と、女子学生には言っております。やっぱり、五十過ぎてしみじみとわかってくるものがあるかなっていうふうに思っています。

さて、そろそろ到着されるかと思いますが、この間に少し本のご紹介をしてよろしいでしょうか。会場の外で、清水先生の本を三種類販売しております。値段を見ていただければわかりますが、著者割そのままのお値段で、たいへんお安くなっております。それぞれ雰囲気の違い、どれも素晴らしいのですが、特に『学生が輝くとき』はお薦めしたいと思います。私は春から、うちのゼミ生は全員これを必読にするので、ゼミ生の人数分買うことにしました。ただ、世の中にはこんなに凄い教育者がいるのだということを知ると、学生たちが今度から私を冷たい目で見るといじやないかという心配もありますが、それでもなお、まず学生に読んでほしいと思います。あとは、これから大

学生になろうとする人たち、あるいは、そういう年齢のお子さんを持っていらっしゃる保護者の方々、お父様、お母様にもぜひ読んでいただきたいと思います。そして、何よりも教員が読むべき本だと思います。清水先生の学生さんたちは、「うちのゼミは戦場だ」と言うのだそうです。いったいどういう戦いがあのゼミで起こっているのか、読みながら本当に私は胸を打たれました。

また、『そして、ねずみ女房は星を見た』というのも、清水先生の児童文学評論家としてのお力のごくよくわかる、素晴らしい児童文学の解説書です。子供たちに、これぞという本を

読ませたいと思っていらつしゃったら、またどういふ本を読ませたいのかと考えていらつしゃったら、ぜひとも一度目を通していただければと思います。

『幸福に驚く力』というのも、清水先生の社会を見る目とか、そういうものが非常に鋭く出ている素晴らしいご本だと思います。ぜひとも、お買い求めいただければ嬉しいな、と思っております。

紹介が長くなってしまいました。それでは、今から到着されるまで少しお休みにしたいと思います。どうもありがとうございました。